

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 初修中国語オンライン定期試験の実践報告：大規模クラスにおける筆記試験実施の試み |
| Author(s) | 山本, 孝子 |
| Citation | 広島外国語教育研究, 25 : 211 - 220 |
| Issue Date | 2022-03-01 |
| DOI | |
| Self DOI | 10.15027/51971 |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051971 |
| Right | Copyright (c) 2022 広島大学外国語教育研究センター |
| Relation | |



初修中国語オンライン定期試験の実践報告

— 大規模クラスにおける筆記試験実施の試み —

山本孝子

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、2020年度初めに最初の緊急事態宣言が発令され、多くの大学でオンライン授業が実施されることとなった。5月末の解除後は徐々に対面授業も再開されたが、登校が難しい学生への配慮・学修機会の確保が求められ、コロナ禍以前と同様の定期試験を実施することが難しくなった。筆者は2020年度は関西圏の国私立大学三校で、2021年度は広島大学において初修外国語科目（中国語）を担当し、本稿執筆時点で、オンライン定期試験（筆記試験）を5回実施している¹⁾。その結果を見ると、従来の対面型試験と比較しても全体の得点分布に極端な偏りは認められず、中国語能力の到達度を評価することにおおむね成功したといえる。ここでは、今年度広島大学での実践例を中心に、その方法を紹介し、経験を振り返り、得られた知見を整理して報告する。種々制約がある中、テクノロジーに疎く、ICT教育に関する知識や経験もなかった筆者が、必要に迫られて模索しながら実施したものであり、今後改善すべき課題も残されている。この報告が、with コロナ・after コロナの時代に求められる初修外国語科目オンライン試験のあり方について、議論を深めるきっかけになれば幸いである。

2. 筆記試験の実施方法と意図

2.1. 2020年度の経験から

新学期の遠隔授業決定から授業開始までは極めて短い時間（最長でも1ヶ月程度）しかなく、十分な準備もできないまま手探りで対応したのに比べ、学期末の定期試験までには若干の余裕があった。その間に教員・学生ともにオンライン授業にも少しずつ慣れ、各種システムの操作方法に関する疑問や技術的なトラブルが減り、授業に支障のない程度になっていた。

ほぼ例年通り、シラバスに沿って授業を進めることができていたが、授業時間内で定期的実施していた小テストの出題形式や実施方法については変更せざるを得なかった。従来教室で実施していた小テストでは日文中訳を8問程度出題し、授業の冒頭10分程度で実施していたが、学習管理システム（LMS）の小テスト機能を利用したオンライン小テストでは、1回（制限時間5分）あたり3問、中文日訳もしくは選択式問題とし、中国語（簡体字やピンイン）で答える問題は出さなかった。これは、中国語の実力とは直接関係のない誤答や制限時間内に解答できない学生が増えるためである。オンライン授業開始時に、学生はパソコンやスマートフォンで中国語を入力できるように設定している。しかしながら、ピンインでキーボード入力する際には、「ü」を「v」で代用する、「这儿 zhèr」は「zher」と入力すると「这人」と誤変換されるため「zheer」と入力し変換する、といった手順を覚えておく必要があり、授業中も手間取る学生が少なくなかった。

また、機械的なトラブルが発生した場合に備えて、小テストは毎週3回ずつ実施していた²⁾。学生にはいずれか1回のみ、都合の良い時間を選んで受験するように指示し、複数回受験した場合は初回分のみを評価の対象とすることを伝えた。機械トラブルなどが発生した場合にはその都

度連絡させ、当該回の得点を無効とし、次の回の受験を許可した。3回目でのトラブルは、再受験の機会は与えられないので、早めに受験するよう促した³⁾。

大学から学期末に定期試験が実施できない場合に備えて、「評点」の根拠となる資料を残すよう求められていたこともあり、小テストに加えて、教科書の練習問題を毎回の課題とした。こちらは、日文中訳が中心で、手書きのものをスキャン（もしくは写真撮影）してLMSの課題提出機能を使い、期日（授業日前日正午）までに指定の場所に提出させ、授業時間内に答え合わせ、フィードバックを行った。

学期末が近づくにつれ、各大学からオンライン試験実施に関するガイドラインが示され、教員向けのオンライン講習会なども開催されたが、いずれも初修外国語科目に特化したものではなかった。まず、レポート形式の試験は科目の性質にそぐわない。また、基礎知識を問う科目や大人教講義向けのwebフォームを利用した問題作成・出題・採点は、記述式か選択式かを問わず、中国語の授業の到達目標達成度を評価する上で必ずしも適当であるとは思えなかった。上述のように、語学科目では文字入力の問題がある。特に中国語では、時間制限のある試験において、簡体字や声調付きのピンインを画面上のフォームに直接解答を入力させることは難しく、英語など他の外国語科目とはまた異なる工夫が必要となる。

公正な試験を行うための不正行為への対応についても、時間制限によって抑止効果をねらう、ウェブカメラを常時オンにした状態でモニタリングを行うと同時に録画により後日確認できるよう保存する⁴⁾、といった方法が示されたが、教室で実施する試験ほど厳密に試験監督を行うことは不可能であり、通信環境の問題もあり⁵⁾、あまり現実的ではないと思われた。

2.2. 基本方針

学生に不公平感を抱かせないように、実力を発揮できる場を提供できるように心がけた。不正行為に対しては、カンニングし放題で真面目な学生が損をするといった意識を持たせないよう、一定の抑止力を確保した。通信環境、プリンタ等など機器の有無、カメラのオン・オフ、タイピング能力など、学習到達度とは関係のないところで有利・不利が生じないように配慮した。

オンライン試験を実施するに当たり、最も重視したのは試験のためだけに新しいツール、システムを導入することは避けるということである。不要なトラブルや負担が発生しないよう、日常的に同期型オンライン授業や課題提出で使用しているweb会議システム（ZoomあるいはMicrosoft Teams）およびLMSでできることを工夫することにした⁶⁾。特に一年生は、オンライン試験はもとより、大学入学後定期試験を受験するのも初めてなので、事前に手順を確認し、練習しておくことが重要である⁷⁾。

次に、不正行為への対応、防止策については、「監視」する努力をするよりも、問題の出題方法を工夫することや評価の観点を変えることを選択した。カメラをオンにした状態であっても、画面に映らない部分で何をしているか把握できないため、カンニングを完全に防止することは難しい。特に、web上での解答入力の場合、「リモート制御」機能を使い、第三者が遠隔操作によって解答を手助けする可能性を排除できない。例えば、Teamsで試験を実施中、別にZoomを立ち上げて画面共有を行い、第三者にリモート制御の権限を与えれば、簡単に替え玉受験ができてしまう。

相手の視線がどこに向けられているかわからない状態で、カメラの前に長時間拘束することは、学生に過度のストレスを与えかねないということも考慮した。他人の力を借りること（他の受験

者との相談や、オンライン翻訳サービスの利用)は防ぎたいと考えたが、教科書や自筆のノートを時折参照する程度であれば中国語の習熟度ははかる上で、大きな影響はないと判断した。

最後に、ネットワーク障害のリスクを低減することである。突発的なトラブルが発生したときも慌てることのないよう、複数のパターンを想定して対策を講じ、学生にもあらかじめ通知しておいた。

このような方針に基づく具体的な取り組みについては、次節で紹介したい。

2.3. 試験問題の提示と解答の方法

小テストではLMSの小テスト機能を使っていたが、問題文を文字データとして提供した場合⁸⁾、コピー&ペーストが容易であることから、オンライン辞書や自動翻訳システムの利用、友人同士での相談などが横行する懸念があった。よって、普段の授業と同様にZoomやTeamsの画面共有機能を使い、PowerPointで試験問題を提示することにした⁹⁾。また、同様の理由から、答えは手書きのもののみ受け付けることとした。解答用紙については事前に「サンプル」をPDFで配布したが、自宅にプリンタのない学生に配慮し、手元にあるレポート用紙やコピー用紙に必要事項を記入して使用することも認めた。

試験問題はPowerPointのスライド1枚につき1問ずつ書き込み、[画面切り替え]タブの[画面切り替えのタイミング]にある[自動的に切り替え]にチェックマークを付け、指定の時間(60秒ないし90秒)ごとに表示されるスライド(試験問題)が自動で切り替わるように設定した¹⁰⁾。これにより、時間制限による不正抑止効果も期待できる。各問題は一度しか表示しないため、教科書を調べながら解答していたのでは、次の問題に取り組むことができず、最終的に高得点を望めない。白紙答案が出ない問題作成を心がけたが、仮に全く解けない問題が出題された場合、その解答に時間をかけるよりも、次に進んだ方が高得点をねらえると学生の心理に働きかけることで、カンニングを防ぐことを意図した。

毎回多めに出题し、学生にあらかじめ指定した数を選択解答させた。指定数は、20問中15問、30問中20問、50問中40問など、試験時間に応じて若干調整を行った。提出された答案を見ると、各学生が選択解答した設問に完全重複は見られず、解答の共有が疑われる不自然に類似した誤答や、教科書を含む他人の書いたものを丸写しにしたような答案は認められなかった。機械的に解答を導き出すことのできる問題、例えば、複合母音のピンインについて、声母がなく韻母だけで構成される場合の表記に書き換える(uo→wo)といった問題でも誤答が少なくなかったことから、教科書やノートを参照することなく、自分で考え、解答していたものと思われる¹¹⁾。出題範囲が広く、普段から学習していなければ、教科書のどの頁を見ればよいのか、すぐに探し出すことは困難である。また、教科書の例文をそのままの順に出题するわけではなく、各課で得た知識を体系立てて頭の中に入れていなければ解くことのできない問題も多い(教科書の暗記、丸写しでは正解とならない)。結果として、各回の試験において全問正解者(満点)はひとりもおらず、筆記試験の得点分布は例年と比べて大きな変化は見られなかった¹²⁾。

全問必須解答とせず選択解答としたのは、不正防止と同時に通信障害への対策も兼ねていた。同期型オンライン授業で、通信状況はおおむね問題はなかったが、時折不安定になり数秒から数分通信が途切れてしまうこともあった。1問1分(あるいは90秒)で問題を切り替えるため、5問から10問の余裕を持たせておけば、中断した場合でも数分以内に再接続できれば残りの問題を解答することで対応でき、個別に追試験等の代替措置を講じる必要がなくなる。

実際に問題が発生したのは、答案の提出先である大学の LMS であり、出題終了直後にアクセスが集中したことによる負荷¹³⁾、あるいは学生の操作ミスによる。これは想定範囲内であり、指定の提出場所にアクセスができなかった場合、ファイルのアップロードに時間がかかる場合、提出ファイルを間違えた場合には、メールや Zoom、Teams のチャット機能で速やかに教員に連絡し、指示に従ってメールに添付などの方法で締め切りまでに提出を終えるよう伝えていたため、特に大きなトラブルとはならなかった¹⁴⁾。

3. 広島大学におけるオンライン定期試験の実施状況

広島大学で担当している初修中国語科目は、いずれも2021年度1・2タームを通して Teams を利用した同期型（同時双方向型）授業を実施した。担当科目のうち、ベーシック・コース（週2コマ）は、今年度より複数クラスを统一的に運営する新しい教育体制を導入している¹⁵⁾。従来の30～40人規模のクラスを同一曜日・時限内に3クラス合同で授業を進めているため、定期試験の受験者は100名を超える。また、別にインテンシブ・コース（週4コマ）では、週2コマを筆者が担当しているが、このクラスについても同一曜日・時限に開講されている他教員担当のインテンシブ・コースと合同で授業を行っており、試験も統一問題で実施することにしたため、受験者は60名あまりとなる。複数の教員で分担したとしても、画面を通してこれほど多くの学生の様子を常に監視することは実質不可能である。それでも試験は授業の到達目標に沿った内容と形式であることが大前提であり、人数が多いからといって、学生に「手抜き」と思われるような選択式問題を大量に出題し、自動採点機能を使うようなことはしたくなかった。2020年度に筆者が試した方法であれば、大規模クラスでも対応可能であると判断し、他の教員と相談の上、筆者が実施要領と試験問題のたたき台を作成することとなった。

3.1. 出題例

2020年度の経験を踏まえ、広島大学の授業内容、各クラスの習熟度に合わせて、問題形式やスライド表示時間などを調整・工夫した。

ベーシック・コースとインテンシブ・コースでは進度に差はあるものの、いずれの授業でも「聞く」「話す」「読む」「書く」の四技能のうち、特に「聞く」「話す」に重きを置き、「条件反射的に言葉が口をついて出てくるように」¹⁶⁾ 繰り返し訓練を行っている。そのため、筆記試験についても、個別の文法知識ではなく、「正確に受け取り、正確に伝える」力を評価したいと考えた。「誰が解いても答えが同じ」になるような「知識」を問う形式では不正防止に腐心せざるを得ないため、可能な限り減らした。また、最低限身につけておくべき基本単語を除き、ある特定の単語を覚えていなければ正解を導き出せないような翻訳の問題はできるだけ避けた¹⁷⁾。以下に、具体例をいくつか示す（来年度以降も同じ教材を継続使用することを考慮し、ここには実際に出題した問題ではなく、サンプルを示す）。

(1) 相手や場面に応じた適切な表現を問う。

「朝、先生に会った場合、中国語でどのようにあいさつしますか。」

解答例：「老师，早上好！」「老师，您好！」「老师好！」など

もしこれが『先生，おはようございます』を中国語に訳しなさい』という日文中訳の問題であれば、「老师，早上好！」以外は不正確な訳文として減点の対象になるかもしれないが、朝，

先生に会ったときのあいさつとしてはいずれも自然な表現であり、広く許容した。

「次の A と B の対話文について () 内に適当なフレーズを入れ、自然な会話を完成させなさい。また、完成した文のピンインを記しなさい。A : () B : 不客气。」

解答例：「谢谢！」など

日常的に使う表現が身についているかどうかを判断する。

(2) 運用スキルの習熟度、語彙の用法を問う。

「喜欢」を使って短文を作りなさい。

解答例：「我喜欢猫。」「我喜欢他。」「我喜欢看书。」など

名詞や代名詞、動詞句を目的語とする「喜欢」の使い方が身についているかどうかを確認する。

(3) イラストの内容を説明・描写する。

カラー写真やイラストを多用できるのはオンライン試験のメリットのひとつである。白紙答案だけでなく、デタラメ解答による偶然得点をなくす効果も期待できる。状況を的確に描写・伝達する能力を評価した¹⁸⁾。

3.2. 問題の表示時間と出題数

問題の表示は、「問題を読んで考える時間」「答案用紙に解答を書き記す時間」を確保しつつ、「調べる時間」を与えないタイミングで切り替える必要がある。

2019年度以前の対面授業では、1課もしくは2課ごとに小テストを実施していた。出題数は10問、すべて記述式問題（日文中訳、ピンインから簡体字への書き換え）である。遅い学生でも開始から7～8分程度で解答を終えており、10分あれば見直しにあてる時間を確保できていた。また、2020年度に実施したオンライン小テストでは、余裕を持たせて5分の制限時間で3問中文日訳の問題を出していたが、アクセスログを見ると早ければ1分半ほど、8～9割が3分以内に提出を終えていた。以上を踏まえて、2020年度は1問当たりの表示時間を1分に設定していた。

広島大学では着任後対面での授業を経験しておらず、例年の学生のレベルも十分に把握できていなかったため手探りではあったが、授業中の中国語での問いかけに対する応答の様子から、経験的にインテンシブ・コースは60秒、ベーシック・コースは90秒に設定することとした¹⁹⁾。1タームの採点結果などから²⁰⁾、2タームでも表示時間の変更は行わなかった。ちなみに、90分の試験時間でのそれぞれの出題数と指定解答数は、インテンシブ・コース1ターム50問中40問、2ターム25問中20問、ベーシック・コース1ターム40問中30問、2ターム20問中15問である。2タームは、同一試験時間内で別にリスニング試験を実施したため（詳細は後述する）、筆記試験の出題数を減らしている。

目への負担を減らすため、彩度・明度を落とした色使い（黒板と同じく背景に暗色、文字に明色を選択）で文字は24ポイント以上、画面切り替えのタイミングがわかりやすいように問題番号の奇数・偶数でスライドの背景色を変えた。

「サンプル」問題を提示し、出題形式を事前に通知していたため、苦手な項目を避けて「山を掛ける」のではないかと危惧された。既習表現を十分に運用できているか、学習内容をよく消化しているかを測るために、出題の類型が多様になるように工夫した。一方で、特定の項目、例え

ば「ピンインを覚えるのは嫌い」という学習者がピンインで出題あるいは解答する問題をひとつも選択解答しないといたった状況を避けるため、出題数のバランスを考えた。例えば、インテンシブ・コースの1ターム定期試験では50問中40問選択解答するよう指定し、発音に関する問題（ピンイン、声調、有気音・無気音の別など）を50問中18問出題した。発音問題を完全に避けることは不可能であり、少なくとも8問選択解答せざるを得ない。各設問の難易度や出題順序を偏りのないよう調整し、全問2点（ベーシック・コース1タームのみ3点）の配点とした。

試験時間中は、教員とティーチング・フェロー（TF）やティーチング・アシスタント（TA）が分担して、監督業務に当たった。筆者は主に PowerPoint 画面共有の操作を担当し、残りの教員が監督・質問対応、TF や TA には出席状況や受験者目線で問題がきちんと表示されているかを確認してもらった。試験問題の表示終了から提出締め切り時間までは、LMS への提出状況を随時確認し、メールでの提出を含め、出席者全員の答案が回収できた時点で終了した²¹⁾。採点はタブレット端末やパソコンを使ったが、紙と赤ペンを使っていたときと比べてもそれほど負担を感じることはなかった。

3.3. 余論：Microsoft Forms を利用したリスニング試験

2021年度2タームは、90分の試験時間内に、筆記試験に加えてリスニング試験を実施した。リスニング試験は Microsoft Forms を利用して選択式（択一・多肢選択）問題を出題した。出題数は、インテンシブ・コース20問、ベーシック・コース15問である。

問題音声は YouTube 動画（限定公開）を埋め込み、出題順序と選択肢はシャッフル機能を使って、ランダムに並び替えて表示させた。設問ごとに音声の再生回数・制限時間を設定することはできないので、Microsoft Forms へのアクセス可能時間を制限し（インテンシブ、ベーシックともに40分）、時間内にすべての問題に解答し、送信（提出）を終えるように指示した（全問必須解答）。

Microsoft Forms へは、試験開始時間と同時にアクセス可能とし、終了時間は後半の筆記試験開始と同時刻とした。時間と問題数を調整はしているものの、制限時間ギリギリまで解答を続け、時間切れによる自動送信・回収となることを避けるためである。筆記試験に遅刻しないよう、早めの提出を促した。また、時間に余裕を持って解答を終えた場合も、次に筆記試験があるため、その準備時間に充てるはずで、ほかの学生の解答を手伝うことはしないだろうと考えた。実際、ほとんどの学生はリスニング試験の解答提出後は、速やかに筆記試験会場（Teams 会議）に入室し待機していた。

リスニング試験についても、事前に授業時間内に小テストを実施する、あるいは課題として提示するといったかたちで、Microsoft Forms の操作練習を行った²²⁾。試験当日はアクセス開始時間に TF や TA が動作確認を行い、その後は教員とともに筆記試験会場で待機し、質問やトラブルに備えた。すべて選択式問題で、自動採点を行ったため、採点の負担も軽減された。

4. おわりに

定期試験は実施すること自体に学習効果があり、成績評価だけが目的ではない。各自が試験に向けて復習に取り組み、授業内容を咀嚼することで、従来の対面での試験と比べてもそれほど遜色のないパフォーマンスを示すことができたのではないかと思う。2020年度は文法を中心とする授業を担当していたが、広島大学では「条件反射的に言葉が口をついて出てくるように」、相手の発言に即座に反応できる能力を鍛えるための教材を採用しており、問題を繰り返し読んで答え

を考え出す従来の筆記試験よりも、むしろ今回の実施方法が向いていたかもしれない。また、選択解答にしたことにより白紙答案が見られず、各設問に対する解答内容だけでなく、問題選択における個人差や傾向から、学習者全体の得手不得手意識を把握するのに役立った。

一方で、解答終了後、提出時間までに問題文を再度確認しながら見直しをすることができないこともあり、一部の学生にケアレスミスによる失点が目立った。ピンインを問われているにも関わらず簡体字で答える、あるいはその逆、簡体字の間違い、句読点の抜けなど、授業中や課題返却時のコメントで再三注意したにも関わらず少なくなかった。ただ一概に学生の単純な確認不足と言えない面もある。2タームでは、リスニング試験と筆記試験の結果に大きな差が見られる学生もおり、「聞く」「話す」だけでなく、文字情報の認識、「読む」能力、「書く」活動の実践である作文教育にも注力する必要性を感じた。この結果を真摯に受け止め、改善に向けて取り組んでいきたい。

付記 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「複言語・多言語教育を視野に入れた初・中級学習者用8言語例文パラレルコーパスの開発」（20H01285、研究代表者：岩崎克己）の研究成果の一部である。

参考文献

- 石川慎一郎（2021）。「絵描写作文課題における L2日本語学習者の動詞使用と習熟度の関係——I-JAS の SW1課題データの計量的概観——」『統計数理研究所共同研究レポート』444, pp.1-22.
- Duha Tore Altindag, Elif S. Filiz, and Erdal Tekin (2021), Is Online Education Working?, NBER Working Paper No. 29113, <https://www.nber.org/papers/w29113>（最終閲覧日：2021年10月11日）
- Michael Harrington (2017), Lexical Facility: Bringing Size and Speed Together, *SECOND LANGUAGE*, 16, pp.5-18.
- Norman Segalowitz (2003), Automaticity and Second Languages, in Catherine J. Doughty and Michael H. Long ed., *The handbook of second language acquisition*, Malden: Blackwell Pub., CHAPTER 13, pp.382-408.

注

- 1) 2020年度前期中間・前期期末・後期期末, 2021年度1ターム末・2ターム末(広島大学ではクォーター制が導入されている)に、いずれも初級中国語2クラスずつ、延べ10回に加え、追試験も同様にオンライン試験を実施した。なお、この追試験は忌引き等のやむを得ない事情によるものであり、通信障害や機器の故障等オンライン試験特有の問題が発生したためではない。
- 2) 週1コマ、木曜日の授業であれば、第1回：授業日翌日金曜日正午～土曜日正午、第2回：日曜日正午～月曜日正午、第3回：火曜日正午～水曜日正午に実施した。
- 3) 3回分異なる問題を作成し、採点する手間がかかったが、復習や自身の習熟度確認のために毎週3回欠かさず受験する学生もおり、「主体的な学び」につながる思いがけない効果も得られた。
- 4) 実際に経験したわけではない（気づいていないだけかもしれない）が、あらかじめパソコンに向かっている自分の姿を録画したビデオをバーチャル背景としてアップロードし、ループ再生して授業中離席する学生もいるらしく、モニタリングで見抜くのは難しそうである。プライ

- バシー保護の問題もあるが、試験時はバーチャル背景（静止画・動画）の使用を禁止にするなどの対策が必要となるだろう。
- 5) 2020年前期の頃は全員がカメラをオンにすると、画面が固まったり、落ちたりする頻度が高かった。
 - 6) 替え玉受験を完全に排除できないとはいえ、学生IDを用いてログインする必要がある、本人確認ができる。また、答案提出時に、答案用紙の余白部分に学生証を置き、あわせてスキャン（写真撮影）するよう指示することもできる。
 - 7) 学生用情報ポータルサイトに試験時間割表が掲示される時期に、定期試験実施要領をPDFで配布し、授業中に口頭で説明を行った。また、本試験と同じ形式のサンプル問題を提示し、解答の手順を確認させた。
 - 8) データの提供方法はwebフォームを利用する以外にも、試験問題（パスワード保護したPDFデータ）を配布しておき、試験開始時にパスワードを通知する、といった方法が考えられる。
 - 9) それでもスマートフォンのカメラを使用してテキストを翻訳することは可能であるが、コピー＆ペーストに比べればテキスト読み取りの精度が落ち、時間も手間もかかることからそれほどこだわる必要はないと考えた。ただ、スマホネイティブ世代の学生は、対面授業でもこちらからの問いかけに対し、SiriなどのAIアシスタントに答えさせるといった予期せぬ行動をとることがあり、不正の余地をなくすことは非常に困難である。
 - 10) 試験中に画面切り替えの操作をする必要がなく、メールやチャットで不具合の報告があったときにも、試験を中断することなく監督者一人で対応することができた。
 - 11) 一校の中国語入門クラス・中級クラスでは、試験に代えて最終週の授業で「総復習課題」のプリント（PDF）を配布し、時間内に手書きで解答・提出させた。「試験」ではないので、持込参照物についても一切制限しなかったが、その結果は普段の授業中の様子や課題の出来具合から予想された実力とほぼ一致していた。中級クラスの長文読解問題でも自動翻訳などを使ったと思われる解答は見られなかった。
 - 12) オンライン授業への変更にともなって、成績評価の基準をいつもよりも「甘くした」という認識はない。一方で、教育効果や到達水準の向上が見られたとも思わない。初修外国語に関するデータではないが、Altindag et al. (2021) では、対面授業とオンライン授業の効果を比較分析し、オンライン授業を受講した学生の成績が総じて上昇したのは、大学が学生の評価方針を変更したことや教員がより柔軟な方法で成績評価を行ったことと関係すると指摘する。
 - 13) 試験問題を再度確認して答案を見直すということができないため、早めに提出する学生が多く、締め切り時間直前ではなく、出題終了直後にアクセスが集中していた。締め切りまでに時間の余裕があったため、数分待てば解決した。
 - 14) メールでの答案提出となったのは、1回の試験当たり、1クラス40人ほどのうち多くても2~3名という状況であった。
 - 15) 普段の授業では、教員が学生全体に向けた文法項目の解説など（「講義」部分）を行い、個別の発音指導や少人数での会話練習（「演習」部分）は教員の統括のもとティーチング・フェロー（TF）が主導している。1教室1教員1クラスに拘らない学習環境をデザインし、主担当・副担当教員2名に加え、3名のTFが授業運営に関わっている。
 - 16) 荒見泰史編『新概念漢語（句型操練分冊）』太史閣出版, 2021, 2頁。これはベーシック・コース、インテンシブ・コースともに採用している教科書である。

- 17) 履修者の中には、「訳す」能力が重視される中国語検定試験を受験する者もあり、翻訳力の重要性を軽んじるわけではない。
 - 18) このような出題形式では、習熟度により使用する語句に違いが見られることが指摘されている(石川 2021)。今回の試験は入門段階で、運用できる語彙・文法が限られているため顕著な差はなく、文法・内容が正しければ一律に点数を与えた。今後レベルが上がれば、単純な主語述語からなる文か複文か、修飾語の使用の有無などにより、加点・減点するなど評価項目や基準を再設定することが必要であろう。
- 追記：本稿脱稿後、インテンシブ・コース3タームの定期試験を実施した(2タームと同じく、リスニング試験20問全問必須解答、筆記試験25問中20問選択解答)。3タームのイラスト問題では、指定の語句(「着」「在」のいずれか／「从」「离」のいずれか／「是～的」構文など)を用いて説明・描写するよう指示し、条件を満たさない場合、文法・内容が正しくとも不正解とした。
- 19) 第二外国語の習熟度と処理速度(語彙・文)の関係については、Segalowitz (2003), Harrington (2017) など多くの研究で指摘されている。
 - 20) 科目を問わず、どのクラスも平均点は100点満点換算で70～75点であった。
 - 21) 今後は Teams 内で完結するよう、課題・成績管理機能の利用を検討したい。
 - 22) 課題では語句整序問題も出題したが、定期試験はリスニングに絞った。テキスト入力による記述解答は上述の如くタイピングの問題があるため、課題や小テストでも出題していない。

ABSTRACT

A Report on Online Examinations in Chinese Language Courses for Beginners

Takako YAMAMOTO

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

This paper documents and reflects on the creation of a Chinese writing test conducted online using a video conferencing platform (Zoom or Microsoft Teams). One of the purposes of an examination is to evaluate the students' level of learning, and teachers' prime concern must be on ensuring its quality and fairness. It is also important and necessary to lighten the burden imposed on both students and teachers struggling with online teaching and learning. Consequently, the author decided not to introduce new tools or systems just for online exams, and instead used Microsoft PowerPoint presentations with screen sharing. There are four key elements regarding the examination.

(1) *The method of question presentation.* Each question is provided on one slide, and all the slide show's transitions are set up at the same speed (the response time for each question) to create a self-running presentation. Every question slide is displayed only once, and students cannot navigate back to previous slides. The number of test questions given to the examinee exceeds the number of answers required so that examinees can skip the questions they cannot answer. In this way, it is possible to reduce cheating to a certain extent without strict monitoring.

(2) *Early notification.* It is necessary to distribute the exam guideline and procedure to students so that they can familiarize themselves with the testing procedure beforehand. Early notification also allows students enough time to ask for help. In addition, students tend to review what they have learned more often when they know they have an examination, so this has a motivating effect.

(3) *Elimination of inequalities.* Unlike face-to-face examinations, online tests can be taken anywhere. Conditions may differ in many ways including equipment, devices, and students' technological capabilities. A convenient option should be offered for test takers in order to avoid a particular student gaining an unfair advantage. Teachers cannot ask students to print examination papers on-site, or scan and convert them to PDF files because many students do not have printers and scanners in their possession. However, typing skill and speed is not an issue in testing students' Chinese language proficiency.

(4) *Evaluation.* Different types of questions not only give every student an equal opportunity to fully demonstrate their learning but also enable teachers to identify which areas are difficult for students. Limited time to access each question makes it possible to estimate the speed at which examinees can process language. In a real conversation, they cannot take time to understand what someone has said, even if they know the meaning of the words. This is an important aspect of evaluation because our Chinese course is focused on dialogue and communication skills.